

二国間交流事業 共同研究報告書

令和6年4月12日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
九州大学大学院 医学研究院
[職・氏名]
准教授・加藤隆弘
[課題番号]
JPJSBP 120218816

1. 事業名 相手国: 韓国 (振興会対応機関: NRF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 日韓における現代のうつ病・ひきこもりに関する比較研究

(英文) A Comparative Study on Modern Depression and Hikikomori between Japan and Korea

3. 共同研究実施期間 2021年4月1日～2024年3月31日 (3年0ヶ月)【延長前】 2021年4月1日～2023年3月31日 (2年0ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Catholic University of Daegu・Associate Professor・Choi TaeYoung

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		1,642,000 円
内訳	1年度目執行経費	502,000 円
	2年度目執行経費	1,140,000 円
	3年度目執行経費	円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	13名
相手国側参加者等	10名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	0	0	0(0)
2年度目	0	0	3(0)
3年度目	3	0	3(0)

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入: 相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1) 研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

日本と韓国では地理的に隣国であり、文化社会的に共通する部分や社会文化的な影響が大きいとされる、うつ病の表現型や高い自殺率といった類似点が挙げられる一方で、医療体制や政策では異なる面も多い。本研究の目的は共通した文化社会的背景とともに異なる面も有する日韓両国において、うつ病患者とひきこもり者の表現型を比較検証することであった。それぞれの国の症例の特徴を抽出し、両国の文化社会的背景や医療施策を両国の専門家同士で分かち合うことで、よりよい両症候群の治療法の開発と精神医療の創出を目的とした。3年にわたる研究交流を通して、両国における調査実施とともに、本研究の進捗会議に合わせて日韓両国の若手研究者支援のためのワークショップを開催した。

(2) 学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

日本ではひきこもり(hikikomori)や従来のうつ病とは異なる表現型の新型うつ(modern-type depression)が報告されてきたが、本共同研究では韓国国内において初めて新型うつを同定し、日本と類似したひきこもりや新型うつの患者が存在することが示された。またひきこもりの発生機序について、韓国ではインターネット依存やゲーム障害に陥ることでひきこもり状況になる可能性が高いことや、女性のひきこもりの割合が高いことが明らかとなり、共通する病理の背景に、異なる文化や社会環境の影響があることが示唆された。

(3) 相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

上述の通り、韓国国内において初めて新型うつを同定し、日本と類似したひきこもりや新型うつの患者が存在することを実証的に示すことに成功した。具体的には、下記の論文を韓国語雑誌に掲載するという成果を得た。

Je SR, An YW, Kato TA, Choi TY (2023) Psychopathological Characteristics of Modern Type Depression. J Korean Soc Biol Ther Psychiatry, 29(3):61-67.

(4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

ひきこもりが日本・韓国を含む東アジアに多いことは以前より認識されていたが、本研究により新型うつが韓国でも認められることが明らかになり、ひきこもりの発生要因として、社会的なストレス→新型うつ→ひきこもりというパスウェイを両国での共通基盤として提唱することになった社会的意義は大きい。今後こうした知見をもとに共同でひきこもり・新型うつの予防法・支援法の開発に取り組む礎が築かれた。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

2021年度オンライン開催・2022年度ハイブリッド開催、2023年度は日本現地開催となったワークショップ「日韓両国の若い精神科医のための合同研修会」には、両国で述べ60名近くの若手研究者／若手医師・心理師が参加した。ワークショップでの研究発表や、病院(両国)、ひきこもり支援センター(日本)、インターネット依存症治療施設(韓国)等の実地見学も行い、両国の支援体制・研究体制の相違を若手が体験的に知る機会となり、参加者のモチベーションを刺激し、幅広い視野と国際感覚を有した若手研究者養成と両国の国際共同研究の推進に寄与した。

(6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本研究によりうつ病・ひきこもりに関する新たな知見が見出されたことで両症候群の新しい支援法を提唱できるようになった。Choi TYは韓国でひきこもり訪問サービスを立ち上げており(Lee PCN 2013)、本研究交流で得られた知見をもとに、日本ではひきこもりやうつ病のアウトリーチ支援の一環としてインターネット上の仮想空間(メタバース)やバーチャルリアリティ(VR)を活用した新しい支援法の創出を検討している。日韓両国でのこうした知見を広く世界に発信することで、世界中に拡がりつつある病的ひきこもりの打開に貢献することが期待される。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など